

# はるす

発行日 2003年12月24日 第14号  
発行 札幌歯科医師会立口腔医療センター  
〒064-0807札幌市中央区南7条西10丁目  
TEL (011)512-9497 FAX (011)511-2272  
http://www.dnet.or.jp/center/  
E-mail:sasshi@dnet.or.jp E-mail:omc-s@dnet.or.jp  
発行人 菊田浩一 発行責任者 鶴岡一彦

センター開設30周年記念によせて



社団法人札幌歯科医師会 会長 鶴岡一彦

札幌歯科医師会立口腔医療センター開設30年の記念すべき年を、皆さまと共に迎えられることは、大変な慶びであり誠に光栄に存じます。

この間、診療・運営にご理解を賜りました患者さん、保護者の皆さま方、入所施設等の職員の方々に対しまして、心より感謝を申し上げる次第です。

また、多大なるご協力をいただいております、北海道・札幌市・北海道歯科医師会・札幌医科大学口腔外科・北海道大学大学院歯学研究科・北海道歯科衛生士会札幌支部をはじめ関係各位に、心より御礼申し上げますと共に、センターの確たる礎を築き、運営基盤整備と診療、事業の推進充実に奔走・ご尽力されてこられた、歴代所長・所員・運営委員・会員及び職員に深く敬意を表します。

顧みますと、夜間救急歯科診療所を開設いたしました昭和48年の札幌市は、前年の札幌オリンピック開催もあって、近代的な大都市へと目覚ましい発展を遂げ、人口は100万人を突破し、地下鉄開通や地下街などのインフラも整備され、市民のライフスタイルも大きく様変わりしつつありました。

歯科界もビル開業の増加から夜間の疼痛等救急歯科疾患の場合に対応してくれる歯科医院を探し回るといった例も少なくありませんでした。こうした社会環境等の変化と、地域住民のニーズを先取り、夜間における口腔疾患の救急処置を目的に、全国初の年中無休の夜間救急歯科診療所開設に至ったのです。

今年3月末までの来所患者延人数は198,557人で近年は一般診療所における夜間診療実施により受診患者は減少傾向にあります。受診される患者さんがいる限り口腔疾患の救急処置を続けて参る所存です。

一方、昭和57年の国際障害者年を契機に、治療の機会が少ない障がいのある方々への歯科促進を目的に障害者歯科診療所を開設いたしました。

当時は、障がいの者の口腔疾患罹患率が高いにもかかわらず、個人開業医のレベルでの診療体制が十分でない状況にありました。

私共も開設当初は手探りの状態でのスタートとなりましたが、札幌圏を中心に道内各市町村の障がい児（者）の専門医療機関として、歯科診療と口腔衛生指導に積極的に取り組んで参りました。20年間にわたる所員・担当医・スタッフ等の真摯な取り組みが市民の皆さまの厚い信頼を得て、今年3月末までの来所患者延人数は82,700人、開設の翌年から開始致しました全身麻酔下診療の症例数も344例を数えております。

また、平成10年からは摂食・嚥下リハビリテーションをはじめとする新規事業を開始し、要介護者向けの口腔ケア知識の習得のための介護・口腔ケアセミナー、来所患者入所施設職員保健講習会・各種講演会への講師派遣など、公衆衛生活動事業も積極的に推進しております。特に摂食・嚥下リハビリテーションでは、日本摂食・嚥下リハビリテーション学会などの各種学術大会において高い評価を得ております。

昨今の医療を取り巻く環境悪化は一向に歯止めがかかりません。そうした状況にあっても、医療・福祉サービスの充実を求める社会的要求は今後益々強くなるものと思われまます。私共と致しましては、時代の要請に即応しながら診療・事業の充実のみならず、情報発信と意見交換の場を含めた地域歯科医療の拠点として機能し続けるよう、引き続き努めて参りたいと考えております。

おわりに、開設30周年を契機に今後とも地域住民の歯科保健の向上に貢献して参りますので関係各位皆さま方のより一層のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

口腔医療センターを願みて



口腔医療センター所長 菊田浩一

皆さんこんにちは。今年度より当センターの所長を務めております菊田です。センターが開所して30年が経ちました。今回の「ぱるす」はそれを記念しての特集号です。当センターの歴史的な事を少しお知らせします。

昭和48年、札幌市民の夜間における歯の疼痛・口腔内の出血等に対応するための応急処置を目的として最初は夜間救急診療部から始まりました。センターを立ち上げるにあたっての当時ご苦労はさぞや大変だったと思います。診療体制は年中無休、担当する歯科医師は札幌歯科医師会会員の輪番制による当番医とし現在に至っています。日曜日等の休日は札幌医大口腔外科に協力戴いていますが、診療後の疲れている時間でもあり、また大事な時間をさいて来て下さる会員の先生方にはただただ感謝するところです。

その後、昭和57年には障がいを持った方に対する障害者診療部が発足しました。当時障がい者で歯科疾患を持った患者さんを受け入れる医療機関は残念ながら非常に少なかった為、会員の中から診療経験が豊富な先生に診療をお願いし、現在は48名の先生が担当医としてセンターにご協力いただいています。私自身9年間実際の診療に携わりましたが、診療当日は朝から緊張のうえにも気を引き締め無我夢中でやっていた気がします。なかなかユニットに座ってくれなかった患者さんが少しずつ雰囲気慣れてきて、治療が終わると一生懸命に私とスタッフにお礼の挨拶をしてくれると、汗をかいて悪戦苦闘していたのも忘れ自己満足ながら充実感を感じたものでした。

またセンターでは10年前より摂食・嚥下リハビリテーションを行っており、人間が生きるための基本的な機能の一つである食べる機能の障がいに対する指導・訓練を行っています。まだ一般的には浸透していない分野ではありますが、センターではいち早く実績のある専門医を中心にこの分野に取り組み、外部からも大きな評価を得ています。

センターの開設から現状までを紹介いたしました。健全な運営の為に北海道及び札幌市より毎年補助金が繰り入れられています。そのおかげでセンター内の施設・医療器具は充実したものになっており、各自治体の理解と協力の上にセンターが成り立っているのも忘れてはなりません。このように口腔医療センターが沢山の方々に支えられ、また沢山の患者さんに期待されていることに対して、私 所長としての責任の重さが双肩にかかっている毎日ではありますが、所員の先生・スタッフと協力し合い、楽しくそして事故の無いよう皆様のご期待に応える所存でありますのでよろしく願いいたします。

センターでお会いすることがありましたら、どうぞ声をかけて下さい。

夜間救急診療部紹介

歯科衛生士 上田 美喜子

夜間救急診療部が昭和48年に開設され、30年が過ぎました。年中無休の夜間救急診療所は現在でもめずらしく、道内では札幌にしかありません。診療時間は開設時から午後7時から11時までです。

夜間の歯痛や外傷を主訴とする患者さんが主ですが、中には明日結婚式なのに歯が取れたという花嫁さんや海外旅行へ行く前日なのに入れ歯がこわれたといった患者さんもみえます。30年の歴史の中で、多い年は年間8000人を超える方が来院されていましたが、休日や夜間の診療所が増えたこともあり、現在は年間4000人台の患者さんが来院されています。

平日は当番歯科医師1名に常勤歯科衛生士3名がローテーションを組んであたるという体制で、年末年始は歯科医師6名、歯科衛生士及び受付10名体制で診療にあたっています。

患者さんと接するのは1日限り、時間も短時間ですが、様々な症状を訴えて来院される患者さんが“こういう診療所があって助かった”と言ってくれる事が私たちの励みです。

口腔医療センター20年間の「喜怒哀楽」

歯科衛生士 横濱 峰二子

口腔医療センター障害者診療部も20年目を迎えることができました。いままでを振り返ってみますと、あんな事、こんな事、いろいろな思い出と、たくさんの患者さんや保護者の方、施設の先生方との出会いがありました。

そんな中から、強く印象に残っている思い出を語らせていただきます。

- まず、はじめは基くんです。

「基くん、何歳？」

「29歳」

「えっ！じゃあ、今日は何日？」

「12月7日」

いつも声かけに対してオウム返しが日常だった基くんからのこの返事。対話ができている。〈彼が大きく変わろうとしている〉その瞬間、私の身体中に喜びと興奮の渦が廻った。

何と、中学1年生のときから来院して15年目の冬！・・・

あの日の出来事が、今でもはっきりと心に焼きついております。



基くんと一緒に

- 「横濱さん、ちょっと」と囁くように待合室で必ず私を呼び止めた英子さん。

「美智子さん（看護師さん）が、よろしく言ってたよ」

記憶力が良い英子さんの生き甲斐になればと、毎回付き添ってくるというわけにはいかない施設の看護師さんと私との間の連絡係をお願いしていました。

銀山学園から2時間もかけ通院してくれた英子さん。学園祭では、目が不自由にもかかわらず手を取りながら記憶頼りに館内を案内してくれました。また、自分の担当歯科医が「お父さんのようだから」と、お小遣いの中から靴下を買い送ってくれた心優しい方でした。

しかし、もうセンターに通ってくることはありません。平成14年5月27日、病床上で「さあ、元気になって口腔医療センターへ行くよ」という施設の先生からの言葉に、「ウン」とうなずいたのが最期になったという哀しい知らせを受け取りました。

- センターに来るや、診療室のドアをピシャリ。そして、待合室でパニック。

入室から診療台で歯ブラシをるところまで、いろいろな行動変容法を何十回も試みた哲平くんと哲哉くん。そんなふたりとのコミュニケーションにむずかしさを痛感していたときでした。

行動変容法のひとつであるTEACCHとの出会いがありました。

ふつう、TEACCHでは『絵カード』や『写真』を用います。

それを発展させ、患者さんの目線で待合室から診療室に入り検診を受ける一連の過程を『ビデオ』に収め、直ぐにその映像を彼らに見せました。すると、ふたりは何の問題もなかったかのように診療室で検診を受けることができたのです。



\* 患者さんの目線で一連の過程をビデオにおさめて、映像を哲平くんに、見てもらっています。



これらのことを、第18回日本障害者歯科学会 学術大会で報告いたしました。

【光とともに—自閉症児を抱えて—2】秋田書店  
【自閉症ガイドブック】にも記載されています。

### 哲哉くん「卒業証書」授与

- 3歳で来院したときには抑制具に包まれ、泣きながら治療を受けていたレオくん。

そんな彼も20歳。お酒もタバコもOK・・・。

先日、センターの向かいのレストランに入り、『カシスソーダ』と『ビール』で乾杯！

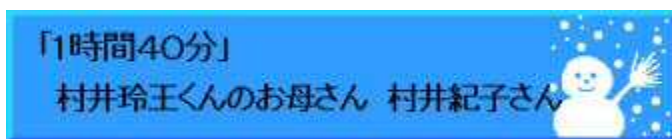
そこには、母親のような気持ちで“タバコを吸うかっこいい青年の姿”を見つめている自分が居りました。



レオくん和乾杯

最後に、20年間たくさんの方々との触れ合いを通し、障がいを持っている人達は人間として<同じ魂の持ち主>であり、純粋な分だけ輝いている人達なのだと教えられました。

また、その子供を支えているお母様達の『人への思いやりと情熱』は、“人間として” “女性として” 尊敬に値するものであり、今後の私の生き方に大きな影響をもたらしてくれると思います。



昭和60年10月頃

初秋のある日、所要で私にとっては大金をバックに納めて、海辺のお寿司屋でお昼ご飯とシャレこんだ。

大満足の後、波打ち際で遊ぶ者、釣りを楽しむ家族連れなどを見ながら、カメラを前にポーズをとったのが間違いのもと、バックを低い防波堤の上に置いてしまったのです。

1時間40分後、置き忘れに気がついて戻る車のスピードと一緒に、頭の中は現金やカードそして[あきらめ]の文字が駆け廻った。車が海辺に近づいて坂道から眼下にあの防波堤が見えた。

黒い一点 あれは... あれはカラス？

いえバックがそのまま置かれてあったのです。

言葉に言い表せない感激に、なんということなのだろう・・・。

私はここでも私に味方してくれる何かをみた気がしたのです。

知的障害のある次男 玲王が口腔医療センターに通い始めてから20年。

医師やスタッフの親身な優しさに触れて、胸が熱くなる思いに何度浸ったことだろう。

医療という形で味方して下さる（助けてくれている人達）ことへの感謝。

ありがとう20年、これからもよろしくお願い致します。



平成1年4月の頃

誠一26歳

合田誠一さんのお母さん



この26年の間、口腔医療センターに通って15年が過ぎました。藁にも縋る思いでいた頃の事、診療室から聞こえてくる泣き叫ぶ声に、身の縮む思いでいた待合室。

いつの日か身は縮まなくなりました。

そこにはあたたかく受け入れてくれる雰囲気、信頼関係を作ろうとそのためには少しの表情も見逃さず、心の中を読み取ろうとするスタッフの皆さんの姿がありました。

どうしたらこの子に精神的苦痛を与えず、良い治療ができるかとそんな思いが表れていました。前進…後退を繰り返しながら少しずつ慣れてきた頃、最も幸運だったのが小島先生との出会いです。

先生は、信頼関係を作ることの大切さとそのためには子供の心のリズムに寄り添いながらたくさん工夫をしてくださったことと思います。

その時、先生とスタッフの皆さんの力がひとつになり、誠一に伝わったのでしょう。

日を追って変化し、笑顔で診療室に入り、リラックスした様子で治療を受けている姿がありました。



輝く笑顔で

ある日、先生の「上の前歯2本、黒くなっているところが白くなったら笑ったときの印象も変わると思うんです。」

その言葉の奥から伝わる人柄がとてもあたたかかったことを思い出します。

そして夢にも思わなかった前歯に白い差し歯が・・・早速写真館に行き「どうしても笑顔の写真が欲しいんです…」

親ばかりである事は、自分でも認めるところです。



その後、小島先生から卒業、バトンタッチして下さったのが松本先生。先生が変わること、誠一には精神的に大きな後退だったかもしれませんが、けれど私の不安はわずかなものでした。

精神面を大切にスタートして下さった松本先生と誠一のことを知り尽くしているスタッフの皆さんがいてくれたからです。

今ひとつの不安は、老いていく自分に、口腔センターまで通う力が無くなった時のことです。

あちらこちらに、口腔センターのように受け入れてくれる歯医者さんが、あってくれたら老いの不安のひとつが解消されます。

“知的障害児（者）・自閉症児（者）との向き合い方は口腔センターをお手本に”の日は来るはず…

その日のためにも先生はじめスタッフの皆さんが長年ご苦労されて築き上げてきたこと、これからも続けて欲しいと願うばかりです。

誠一は、歯の治療と同時に、心の成長も、私は心を癒してもらっています。

もうすぐ27歳の誠一&その母

国澤尋希くんのお母さん

国澤 千鶴子さん



平成3年7月頃

思い起こせば友達の紹介で初めて口腔医療センターに行ったのは、まだ雪の残る3月の事。

その日みぞれが降っていて、なんだか不安な気持ちで向かいました。

受付を済ませイスに座りまわりを見渡したとき、待合室の雰囲気や様子に気持ちがほっと落ち着いたのを憶えています。

あまりの虫歯の多さと治療困難なあばれ様の為、全身麻酔下での治療を勧められましたが、これからの事も考えて、時間がかかっても少しずつ「歯医者さん」に慣れてもらいたいと、普通の治療をお願いしました。

数ヶ月が、徐々に身体を固定するネットからバスタオル1枚になり、そのうち自分でバキュームする余裕までも。

これも先生や衛生士さん方の根気強い治療と指導のおかげです。

あれから15年、やせっぽちの尋希も今はたくましい青年になり、時の早さを感じます。

今でも麻酔注射の時は皆さんを手こずらせているようですが、これからもどうぞよろしくお願いします。

“一生自分の歯で”を目標に、歯の健康に気を配っていきたいと思います。

「口腔医療センターとの出会い」

加藤勝哉さんのお母さん 加藤伸子さん



平成2年2月頃

少し緊張しながら口腔医療センターのドアを開けた私達親子に「こんにちは」とやさしく言葉をかけてくださり心がホッとしたのを今でも覚えています。

勝哉が十歳の時でした。

四歳の時虫歯の治療を受けたくて小児歯科を受診したのですが、勝哉が泣いて診療台から降りようとするのを私が押さえました。

でも、先生に「これでは治療ができないから」と言

われ勝哉にもかわいそうなことをしたと思い、その後は治療をあきらめていた時、小学校のクラスのお母様に口腔医療センターを紹介してもらいました。

その時からのお付き合いで今、勝哉は二十三歳です。大人になりました。

初診の時、ネットを使用していたのが、今は一人で受診できます。

勿論、先生をはじめとして衛生士の皆さまの対応のおかげです。診察では勝哉が不安を感じないようやさしく話しかけ説明してくれて、そのうえほめてくれました。

ロビーで待っている時もやさしく見守ってくれます。

口腔医療センターでは親も子も無駄な気を使うこともなく、時には小学校の時の友達に会ったりして……。居心地の良い場所のひとつです。

勝哉は今、更生施設に通所しています。木作業や製パン作業をしていますが、毎日元気に通っています。

これからも健康な歯と心のために長〜いお付き合いをお願いします。

口腔医療センターにお世話になって  
有藤裕也さんのお母さん 有藤弘子さん

口腔医療センターで、歯の検診・治療を受けることになったのは、長男が6歳ころでした。

自閉症という障害がある我が子は、人一倍警戒心の強い

子で、通い始めの頃はセンターに入ろうとしない、泣いて抵抗することで拒否の意思表示をしていたように思います。

昭和62年5月頃



親としてもできればいきたくない所でしたがそれもいってられずしかったり、なだめたりしながら通っていたことを思い出します。でも、治療に当たってくれたセンターの職員の皆様は、このような子どもや親の気持ちをよく理解してくれ、やさしく、決して強引にはなく、時間をかけながら子どもができるだけ安心、納得できるように治療してくれました。

それでも、親の思いどおりにはいきませんが、少しずつ恐怖感が薄らいでいったようで、中学生のころからは、「歯の検診」に行くといってもそれほど嫌がらなくなりました。

抵抗が激しい時には身体に「ネット」をかけられていましたが、それもいつからかしなくてもよくなりました。

きっと、センターの人達のやさしく包み込むような暖かい雰囲気子どもなりに安心できたのだと思います。

子どもが苦手な嫌がる様々な事(飛行機に乗ること・散髪・髭剃り・

花火・注射・整列・順番待ちなど)を少しずつ慣らしていくことは、親だけでできることではなく、子どもを理解し、支えてくださる周囲の方々のお力添えがあつてのものです。

おかげさまで、今では、自力で福祉施設に通所し、週1回は企業で働くなど、幼稚園や小学生の頃の不安で、大変な状態からはずいぶん成長してきたと思っています。

今では、家庭や施設で与えられた家事や作業なども文句もいわず丹念にこなしている、けなげな姿を見て、育ててきて良かったと思っています。

歯の治療はセンターでしか経験がありませんが、散髪でさえ嫌がり相当苦労した子どもにとってセンターでの検査や治療がなければ歯がどんな状態になっていたか、一般の歯科医院ではどうなっていたかを思うと、センターに対する感謝の気持ちで一杯です。

今でも、子ども自身での歯みがきはなかなか行き届かず、親も面倒でつい怠ってしまいがちです。子どもにも正しい歯磨きの仕方を気長に訓練していくことが親の義務かな、などと思っています。障害のある人たちの歯のケアは、大変なことも多いと思いますが、これからも私たちを支えていたきたいと思っています。



平成9年1月頃



平成1年5月頃



松木亮さん

口腔医療センター 年表

昭和48年4月19日	口腔医療センター附属歯科診療所開設認可
5月1日	夜間救急歯科診療開始(運営委員)
6月1日	会員当番開始
昭和54年5月30日	記録映画「こちらさっぽろ口腔医療センター」完成試写会
昭和57年12月1日	障害者診療開始
昭和58年11月11日	全身麻下診療開始
平成3年9月11日	保健文化賞受賞(尾崎精一会長 皇居にて両陛下に拝謁)
平成10年4月25日	摂食指導外来開始
6月1日	機関誌「ばるす」創刊号発刊
6月20日	第1回保護者対象懇談会開催
平成10年10月28日	第1回在宅介護者教育講座(現 介護・口腔ケアセミナー)開催
平成10年11月13日	第1回施設職員対象口腔ケア講習会開催 (現 来所患者入所施設職員対象保健講習会)

救急診療部からのお知らせ

夜間の歯の痛みなど、救急処置を目的として  
しています。継続的な治療は受けられ  
ませんのでご注意下さい。

診療時間 午後7時～午後11時  
(受付開始時刻 午後6時30分)  
年中無休

電話番号 (011) 511-7774

障害者診療部からのお知らせ

障害者診療部は完全予約制になって  
おります。

予約時間) 月～金曜日 午前9時30分～午後5時  
診療時間)

月 曜日 午後2時～午後5時  
火・水・木・土曜日 午前9時30分～午後5時  
金曜日 午前9時～午後5時  
(午前中は全身麻酔による診療)

電話番号 (011) 512-9497

編集後記

今回はセンター30周年ということで、特集を組ませていただきました。  
お忙しいところたくさんの方の文をお寄せ下さいまして、ありがとうございました。

おかげさまで**30年間の時の流れ**を感じる「りっぱ」なばるすになりました。

次の号から「ふつう」のばるすにもどります。

今回載せられなかった方、しばしお待ち下さい。

今年も残り少なくなりました。

風邪を引かぬよう気をつけて、よいお年をお迎え下さい。

(企画研修部長 中澤 潤)